

キスリン。Bランク冒険者であり、ティマーである。

ティマーは基本、モンスターをタイムし、従えるスキルであり、その能力はタイムしているモンスターに由来する。

故に、非常に不安定であり、軽視される。

例え強いモンスターを従えていても、そのモンスターが負傷、最悪死ねば丸裸状態となり、これまでの実力が無になるに等しいのだ。

故に冒険者ではなく、輸送業や小間使い、肉体労働の現場で見える事が多い。

この厳しい世界で、ティマーという職業で冒険者ランクを上げる事は一般よりも難しい事なのである。

彼が魔境へ来た理由はただ一つ。

強い魔物をタイムする！ これだけだった。

（割愛）

氷蛇の黒旗メンバーと、昼頃に魔境に入った。

鬱蒼とした木々の隙間から光が差し込む幻想的な光景が広がるが、足元は苔むしていたし、倒木があったりして大変だ。

「気をつけたほうがいい、キシリン。特に薦は踏まないように」

「薦、ですか？」

そういえば、太めの薦がある。そう思っていると不意に後ろから強い力で足首を掴まれ、キシリンは思い切り上空へと引っ張り上げられた。

「うわああ！」

魔物だ！ そう思うと同時に「食われる！」がくる。

だが、その薦を切るように炎の玉が飛んできて、キシリンは無事に落下したところをミロトに受けとめられた。

「これが魔境だよ」

「気を、つけます」

本当に、この森でどう生き残ればいいのか分からなかった。

こんな感じで奥へ向かっていくこと二日。キシリンは崖に近い見晴らしのいい場所に来ていた。

「わあ……」

視界が開け、何処までも続く森を眼下に、青い空が見える。風が通り抜ける強さが少し気持ち良く思えた。

「凄い崖ですね。ここにはどんなモンスターがいるんですか？」

そう、何気なく聞いて振り向いたキスリンは、思わずビクリと体を震わせた。今朝まで親切だった氷蛇の黒旗のメンバーがニヤリと笑い武器を抜いたのだ。

「そうだな、ここらは鳥系が来るみたいだぜ」

「あの……どうして武器をつ！」

そう呟いた所で突如攻撃魔法が放たれ、キスリンは腰を抜かして後退った。

「お前、五月蠅い」

魔法士ヴェントが冷たい様子で言う。盗賊ジュラはカラカラ笑いながら一瞬でキスリンの前に来た。

「お前って、ほつつつとうに、バカだよなあ！」

「っ！」

流石に、分かった。セエルの言っていた事が正しかった。

「まあ、早い話が騙されたんだよ」

リーダーミロトの言葉に、涙が出た。

信じたんだ。これで立て直すって。なのに……！

「おっ、俺を殺しても、何も、持っていない。モンスターも怪我して、動けない！ 殺しても、何もっ！」

「そーれーがー、バァアカだって言っただよ！」

「っ！」

完全にバカにされた物言いに萎縮する。でも、なんで。どうして！ 今持っ
てるお金じゃないなら、何が！

「お前をここでぶつ殺してえ、それに群がってきたモンスターを待ち伏せして倒し
て素材にすんだよ」

「そん、な」

「モンスターは血の臭いが好きだからね」

「倒し放題」

「ああ。でもその前に、身ぐるみは剥ぎ取ってやるからな」

そう言うやいなや、ジュラのナイフがキシリンの服を裂く。薄らと傷が出来て、
立派という程ではない装備が切れていく。

「財布！」

「あ！」

腰にしっかりと固定していた鞆のベルトが切られて、取られる。中には有り金全
部とギルドカードが入っていた。

「安心していいよ、キシリン君。君の死は俺達を逃がそうとした尊い犠牲というこ
とにしておくから」

「よかったなあ！ ギルド記録にプラスが付くぜ」

「そんなっ！」

ダガーが体を薙ぐ度に傷が増える。そのうちにキスリンは崖際まで追い詰められて倒れた。もう、痛くて動けなかった。

「まーだ何か持ってそうなんだよなあ」

そんな事を言ったジュラが、胸元の隠しに手を入れ……お守りを引っ張り出した。「お守りか？　でも、いい魔石ついてんな」

「あ……」

助かる、最後の希望だったかもしれない。それすら取られて……胸に絶望がわき上がった。

「んじゃ、そろそろバイバイのお時間だな」
そう言ったジュラがダガーを振り上げた。

その時だった。

突風が背後で起こり、黒い影が差し込む。それと同時にジュラもヴェントも、ミロトすらも目を見開き後退りして、顔色を悪くした。

『ギャアアアア！』

つんざくような高い鳴き声は空気を揺らし圧迫感すら感じる。背に感じる気配や魔力も、鳥肌が止まらないものだった。

「ワイバーンだと！　もっと奥地にいるだろうが！」

「逃げろ！」

そう言った彼等だが……遅かった。

一番近くにいたジュラの体が薙ぎ払うような一撃で真つ二つになる。

次にヴェントが風魔法で巻き上げられ、きりもみになりながら小さくなった。

唯一ミロトだけは強烈な一撃に吹っ飛んで見えなくなったが、耐えたように見えた。

残されたキスリンは恐怖で歯の根が合わず、情けなく失禁していた。食われるのだと確信していた。

だが……大きな黒い、黒曜石のような鱗に覆われた手が慎重にキスリンを摘まみ上げ、大事なものを抱えるように手に包むとそのまま飛んだ。

風圧と、恐怖とに晒された精神は限界を迎え、直後に完全に気を失った。